

みなさん、おはようございます。

3年生が卒業して、1, 2年生の修了式の日を迎えました。3年生が卒業するときには、1, 2年生が心を込めて送り出してくれました。私としてもみなさんに感謝しています。

今年度を振り返ると、昨年の4月7日に2年生は進級し、1年生は入学しました。5月に1年生の自然教室、6月には体育祭がありました。雨で延期が続きましたが、最後は晴れて白熱した競技が展開されました。7月に生徒総会、9月に生徒会選挙が行われ、委員会や生徒会は2年生が中心となりました。10月は文化祭。直前にインフルエンザが流行し、開催が危ぶまれましたが、4年ぶりに全校生徒での文化祭が実施され、とても盛り上がりました。クラスの合唱も感動的でした。秋から冬にかけては各学年で職業体験や保健指導、福祉体験などがありました。こうした活動の中、毎日の授業で一人ひとりが学力を伸ばしました。

こうして振り返ってみると、みなさんはどんな気持ちですか？とてもいい一年だった、だいたい楽しい一年だったと思えるでしょうか。

人が生きていくうえでは、完璧でなければならないとか、全部だめだったとか、100%か0%かという考え方をすると窮屈になります。「だいたい楽しかった、だいたいよかった、そうでないところはこれからまたがんばろう」と思える心をもつと、余裕が生まれるし、いつも前向きになることができるのではないのでしょうか。

ところで、みなさんは人の心はどんな形をしていると思いますか？もちろん形はないんでしょうけど、イメージするとどうでしょう。

今、有名な野球選手と言えば大谷翔平選手ですが、ちょっと前にはイチロー選手という人が活躍していました。イチロー選手は、私より少し年下ですが、だいたい同世代なので、私も若いころから好きな選手で応援していました。イチロー選手はそれまでみんなが不可能と思っていた記録を次々と打ち立て、人間の可能性のすばらしさを証明してくれました。私にはできませんが、同じ時代を生きてきたことを誇りに思います。

そのイチロー選手が、ある野球の大会でとても不調になってしまったことがあります。チームの足を引っ張ってしまうほどの不調でしたが、ここぞというときに価値あるヒットを打ち、日本代表チームが勝利したことがあります。そのとき、イチロー選手はインタビューでこう言いました。「前の打席で失敗したとき、ほとんど心が折れていたんですけど、最後に打って良かった」

「心が折れる」、この言葉、みなさんも聞いたり使ったりしたことがありますか。イチロー選手が言い始めたのかどうかは分かりませんが、およそ20年前にイチロー選手がこう言ったころから「心が折れる」という言葉はあちらこちらで聞かれるようになりました。

私は、イチロー選手が大好きですが、しかし、この「心が折れる」という言葉には違和感があります。なぜなら、私は、人の心は「折れる」ような形をしていないんじゃないかと思うからです。「心が折れる」ということは、人の心は野球のバットのよう細長くて固い棒の

ような形をしているのでしょうか。もし、固いバットのようなものだとして、そこに当たったものは跳ね飛ばされるし、打ち返せなければそれこそボキッと折れてしまうかもしれません。バットが折れてしまうと、もう直りませんし、バットとしては使えなくなってしまいます。人の心も折れたらバットのように治らないのでしょうか。

私は、人の心は運動会で転がす大玉のように、大きくて丸くて、表面は柔らかくて、でも中は空洞じゃなくて体育の授業で使うウレタンボールみたいにちゃんとつまっていて、触れるとじんわりと温かい、そんな感じじゃないかと思っています。

人の心は、触れるものを受け止められるだけの大きさ、広さ、柔らかさをもっていて、悲しいことやつらいことでへこむことはあっても、中からゆっくりおしかえして、しばらくすると元の丸い形に戻るんじゃないかと思います。たくさんの人が集まっているところを上から見てみると、みなさんが小さいときに遊んだボールプールのように、人の心がたくさん集まって、大きなものや重たいものも安全に支えることができます。ボールプールに飛び込んだときのわくわくするような、楽しい気持ちは、多くの人と人が心で関わった時の気持ちに似ているんじゃないかと思います。人の心にはセンサーがあって、他の人の心を感じて、友達と楽しく過ごすときは、お互いの楽しさが伝わり合う、悩みを相談されたら、同じように心配の心になる、そういう風に他の人に寄り添い、合わせるができるものではないかと思っています。

これは、中川中の生徒が大切にしたい「信頼と共感」という目標に通じますね。

最後に、先日の卒業式で3年生に向けて話したことをもう一度話します。2年生は聞いてくれていましたが、校長先生の話って、すぐ忘れますよね。私もそうでした。ですので、大事なことをもう一度言います。

今、世界では思いをぶつけあい、争い、傷つけあうことが起きていて、私たち大人たちがそれを解決できていません。子どもの世界でも、全国の学校で、「いじめ」という形で人の心を傷つけてしまうことがあります。たとえば、誰かを「なんとか菌」と陰で呼ぶこと、このとても卑怯で残念な表現は何十年も前からあり、今も聞くことがあります。こんな風に言われた人は、つらく悲しく、心が冷たくなったりへこんでしまったりするでしょう。本人が知らなくても、陰で言い合っていたら、それを言っている人たちの心は、センサーがあるので、悪い方向に共感し、悪い心が伝染し、いつのまにか自分たちの心がむしばまれてしまいます。だれにも言わなくても、心の中で人を憎み、馬鹿にするだけでもその人の心は悪い心にかかってしまいます。

いま、中川中の生徒の中に、陰で他の人を「なんとか菌」みたいに言う人はいないと信じますが、もしそんな思いを抱いたり、言ったりしたことがあるという人は、今すぐ、この場でやめる、そういう心を直すと約束しましょう。「信頼と共感」を目標とする中川中では、人の心を踏みにじる「いじめ」は絶対に許しません。このことについては、100%であるべきであり、妥協はしません。生徒のみなさん、これまで通り、丸く大きく温かく、みんなでお互いを支えられる強い心をもって4月を迎えてください。それでは、桜の咲くころ、ふたたび夢に向かって挑戦を始めるみなさんと、この学校で会いたいと思っています。